

『平家物語』における人物の戯画化ということ

—— 卷八・法住寺合戦関連記事をめぐって ——

清水 由美子

一、はじめに

「木曾」と呼ばれる源義仲は、寿永二年（一一八三）七月末に、平氏一門が都落ちをした後の京に入る。平氏に伴われることを避けて脱出し、比叡山に登っていた後白河院を護衛しながらであった。しかし、四ヶ月後の同年十一月十九日に、義仲はその後白河院の御所に向かって弓を引き、火を放つ。

『平家物語』で描かれるその法住寺合戦の描写は、戦闘場面としては特異である。同じように一日の戦いが最終的に放火によって決着した保元の乱を描く『保元物語』とは違って、為朝のように英雄的な活躍をする武士も登場しないし、敗者の悲哀が描かれることもない。何よりも、戦いに臨んだ両者ともに戯画化され、編著者によって嘲笑されながら、戦いの顛末が描かれていくのである。実際には天台座主明雲や園城寺長吏円慶法親王といった人々が巻き込まれ、多くの武士が命を落としているにもかかわらずである。武士が天皇治天の君に向かって矢を放つという意味で

は、承久の乱の先駆けとも言える重要な意義を持った戦いは、『平家物語』において「三人の愚者」(武久堅⁽¹⁾)による笑いを誘う喜劇、「ヲコ」対「ヲコ」の戦いとして語られるのである。

本稿では、その三人の愚者たちの戯画化の持つ意味、『平家物語』の編著者たちがそれぞれを笑いの対象として語るのなぜか、また、どういう経緯で『平家物語』がそうした話を創作、あるいは取り込んでいったのか、といった問題について考察を加えてみたい。

まず、鼓判官と呼ばれた平知康について取り上げる。平知康については、これまでも芸能性、呪術性、宗教性といった観点からさかんに論じられてきた⁽²⁾。本論考では、少し視点を変え、歴史的に見て法住寺合戦を主導したとは考えられない知康が、『平家物語』の中では法住寺合戦が起こるきっかけを作り、敗戦の要因ともなったとして大きく取り上げられることになった背景に、『吾妻鏡』が語るその後の彼の動向や頼朝の見方が影響している可能性を指摘する。

二人めの愚者は後白河院であるが、院は直接笑いの対象とはならない。そのかわりに、知康以外の院方に参じた者たちも愚弄され、笑いの対象となっている。彼らが戯画化される背景には何があるのか。また、そこには、多分に身体的感覚に訴える表現が取り込まれていることについても考察を加えたい。

さらに、もう一人の愚者である義仲の、巻八に入ってから始まる戯画化された描写が、その頃頼朝に下された、いわゆる寿永二年十月宣旨と連動するものであり、そこには頼朝の影が見え隠れすることを指摘したいと考える。

『平家物語』は平家の滅びを描く物語である。しかし、一方、『平家物語』は鎌倉時代に成長していった物語でもある。平家滅亡後の社会の動きと無関係であるはずはないだろう。『平家物語』は、義仲と後白河院の対立という歴史の一齣をどのように語っているのか。その背景を探りたい。

二、平知康の造型と『吾妻鏡』

壹岐守知親の息であった知康が後白河院の寵臣であったことは、『玉葉』の治承五年（一一八一）一月七日条に後白河院の「第一ノ近習者」とあることからわかる。『吉記』寿永二年七月二十六日にも、比叡山に逃れた後白河院の元へ参上した吉田経房が、知康を介して院に見参したとあり、また同書の七月二十七日条で述べられる、義仲と行家の院参の記事でも、知康が「扶持」していることが見える。また、『愚管抄』で法住寺合戦の経緯が述べられる記述でも、「院二候北面下臈友康・公友ナド云者、ヒタ立二武士ヲ立テ、頼朝コソ猶本体トヒシト思テ、物ガラモサコソキコヘケレバ」とあつて、この乱に大きく関わっていることがうかがえる。

様々な芸能に才能を発揮した点についても事実であつたと思われる。例えば、『梁塵秘抄口伝抄』では、後白河院が声がいい点と「面なく」謡う点を評価している。「面なく」とは、厚かましく無遠慮だつたということであろう。『愚管抄』では知康のことを「ツ、ミノ兵衛」と言っている箇所もあるので、「鼓判官」と称されたのも史実であろう。延慶本などの読み本系『平家物語』が記す「ヒフ」という芸（現代のジャグリングのようなものと考えられている^③）や、後に將軍頼家の寵を得ることとなる蹴鞠の才能など、多様な芸を臆面なく披露し、それによつて権力者の懐に入つていく人物だつたのだろう。

その知康が、後白河院の使いとして義仲に対面した時に、「鼓判官」という渾名の由来を失礼な言い方で尋ねられ、その報復として後白河院に讒言したことが、後白河院に武力衝突の決断をさせた『平家物語』諸本は語る。『平家物語』はこれが法住寺合戦の原因だとするのである。さらに、院方の軍奉行を命じられた知康が、鎧を着ずに四天王の絵を描いた甲だけをかぶり、右手で金剛鈴を振り、左手で鉦を持ち、法住寺殿の築垣の上に立つて舞つた、というのも諸本共通である。この様子を見た人々が、知康には天狗がついた、と言つたという場面は、『愚管抄』の「イカニモくコノ院ノ木曾ト御タ、カイハ、天狗ノシワザウタガイナキ事也」という嘆きを思い起こさせる。物語

の叙述の流れの中で、知康は間違ひなく、後白河院の分身であり、院の失敗を一身に引き受ける。

一方、『吉記』の同年十一月十五日条には、「或人示シ送りテ云フ、去十二日、延尉知康、太神宮託宣セシムルノ由称スト云々。近日件ノ男物狂也。信受スベキ□□」という記事があり、合戦の四日前の記事として注目される。このような記事が、『平家物語』の叙述の背景にあるのも間違ひないだろう。そうした彼だからこそ、物語の中でこうした役割を与えられたのである。

こうした知康についてのこれまでの様々な考察の中では、阿部泰郎氏の論考⁽⁴⁾が秀逸である。阿部氏は、説話での描かれ方や同時代資料まで広く目を配りつつ、知康の「ヲコ⁽⁵⁾の者」としての造型の意味を説き、知康の描写に伴う笑いを「強大な武力や権力を持った相手」に対して弱者が持つ「最大の武器」として論じ、その権力者が後白河院のみならず、鎌倉幕府の將軍でもあった、と結論づける。

阿部氏も触れているが、法住寺合戦が義仲方の圧勝で終わった後、もう一度、知康は『平家物語』に登場する。延慶本では以下の記事であり、大江公朝が後白河院の使者として頼朝の所に参上し、合戦の原因が知康にあり、彼が「違勅の者」だと訴えた後の場面である。前述した「ヒフ」はここに見えていて、知康を見かけた頼朝が、頼家に「ヒフ」の芸を見せてもらおうように言い、その芸を披露した知康はさらに、法住寺合戦についての弁明を繰り広げることが、頼朝に相手にしてもらえず、京都に逃げ帰ったという内容である。

知康陳ゼムトテ、追サマニ鎌倉ヘ下テ、兵衛佐ノ許ヘ参テ、「見参入ム」ト伺申ケレドモ、申次者モナカリケレバ、侍ニ推参シタリケルヲ、兵衛佐簾中ヨリ見出テ、子息左衛門督頼家ノ末少クオワシケルニ、「ヤ、アノ知康ハ、究竟ノヒフノ上手ニテアムナルゾ。『是ニテヒフアルベシ』トイヘ」トテ、砂金十二両若君ニ奉リタリケレバ、若君是ヲ持テ、知康ニ、「是ニテヒフアルベシ」ト宣ケレバ、知康十二両ノ金ヲ給テ、「砂金ハ吾朝ノ重宝也。暫ク争カ玉ニハ可ニ取候」ト申テ、懐中スルマ、ニ、庭ヨリ石ヲ三取テ、ヤガテ縁ヲノボリサマニ、目ヨリ下ニテ数百千ノヒフヲ片手ニテツキ、左右手ニテツキ、サマヅニ乱舞シテ、「ヲウ」ト云音ヲアゲテ、ヨ

キ一時ツキタリケレバ、簾中ヨリ始テ、参合タル大名小名、興ニ入テエツボノ会ニテゾ有ケル。兵衛佐、「誠ニ名ヲ得タル者ノ驗ハ有ケリ」トテ、其後見参セラレタリケレバ、知康、「木曾、都へ責入テ、在々所々ヲ追補シ、大臣公卿ニ所ヲモ不レ置、権門勢家ノ御領ヲモ不レ憚乱入テ、狼籍ナノメナラズ。神社仏寺ヲモ怖奉ズ、堂塔ヲワリタキハテ、院御所法住寺殿ニ推寄テ合戦ヲ致テ、八条ノ宮ヲ誅レサセ給ヌ、天台座主明雲僧正ヲ誅レ給ヌ」ナド、有事無事クドキ立テ細ク申ケレドモ、兵衛佐先立テ心得給タリケレバ、万ゾ無返事ニテオワシケレバ、知康サヲ、ノミスクムデ、ハウくニゲ上ニケリ。

知康、サシモ鬱深ク、院マデモ、「不_レ可_レ被_三召仕_一」ト被_レ申タリケルニ、無_レ墓ヒフニ日出テ、兵衛佐見参セラレタリケリ。「人ハイサ、カノ事ナリトモ、能ハ可_レ有物哉」トゾ覚ケル。

(延慶本『平家物語』巻八・卅二「知康関東へ下事 付 知康関東ニテヒフツク事」)

覚一本には「ヒフ」という芸を行ったとする場面はなく、知康が申し開きのために鎌倉に下向したものの、頼朝に相手にされず、面目をなくして帰京、伏見稲荷の近くで生き延びたとする。延慶本でも、覚一本でも彼はここで物語の世界から姿を消す。

現存する『吾妻鏡』には、寿永二年(一一八三)の記録がないので、この年に知康が鎌倉に下向したかどうかはわからない。頼家が生まれたのが寿永元年八月なので、延慶本が語るような状況は全く可能性がないわけではない。しかし、先述の通り、慈円は後白河院に近侍していた大江公朝と知康が頼朝に接近したことが義仲との不和の原因だとしているが、『平家物語』が語るような、院方の敗戦の理由を知康一人に負わせるという記述は当時の記録からは読み取れず、史実ではない可能性が大きいと思われる。公朝が義経や頼朝に報告に行ったというのとはともかく、知康が責任を一手に引き受けて謝罪に赴くということはあり得ないのではないだろうか。

鎌倉幕府や頼朝にとつての知康の存在が大きな問題となるのは、実はもう少し後のことだったと思われる。寿永二年の記事を欠く『吾妻鏡』において、知康の名が最初に見えるのは、元暦二年(一一八五)六月二十二日条で、そこ

では処刑された宗盛とその息清宗の首を六条河原で受け取ったとされる。『吾妻鏡』に依ればその時の知康の肩書きは「檢非違使大夫尉」であり、この時「廷尉」と呼ばれているのは源義経である。この日の記事では、義経もその場にいたかどうか判然としないが、その事実と関わるのか、彼はこの年の十一月の義経の頼朝への反逆及び都落ちに関わっていたようである。『吾妻鏡』十一月三日条で挙げられる義経に同行した主な武士の名前の中に彼の名前は見えないが、十日条には次の通りで、頼朝追討の院宣が義経に下された時に、知康が義経の側に立つと、「腹心」にあると見なされていたことがわかるのである。

鎌倉に還御するの処、左典厩申されて云く、只今都人の伝言に云く、義経反逆の間、追討の宣旨を下さるべきや否やの事、左右内府並びに師納言経房等に仰せ合はざるの処、右府の意見、首尾殊に理を尽くさる。皆これ豈に関東引級の詞なり。内府は是非分明の儀を申されず。左府は早く宣下せらるべきの由申し切らる。師納言は再三これを傾け申すと云々。また刑部卿頼経・右馬権の頭業忠等は、その志偏に豫州の腹心に有り。廷尉知康同前の由と云々。
 (『吾妻鏡』文治元年(一一八五)十一月十日条)

頼朝はこの時、義経と対峙すべく黄瀬川の辺りまで出陣していたが、義経が逐電した報せに鎌倉に戻った。そこに左典厩(一条能保)からの報せが届き、義経の頼朝追討の院宣の要求に対する公卿たちの反応が報告されるのである。

結局、義経は拳兵に失敗し大物浦での遭難の後付き従った人々は離散するのであるが、その後、後白河院と頼朝の間の駆け引きの大きなテーマが、この時に義経の側に立った公卿の処遇になっていく。中でも大蔵卿泰経への頼朝の怒りが大きかったというのには有名であり、申し開きに鎌倉に下向した泰経に対して頼朝が発したのが、有名な「天下の犬」という後白河院への非難であった(後白河院ではなく、泰経に対する言葉だとする説もある)。

知康について見ていくと、約一年後の次の記事が目を引く。知康は義経側に立ったことについての弁明のために、

鎌倉に下向する。

去年行家・義顕等に同意するの凶臣の事、二品の御簷陶に依て、或ひは見任を解却され、或ひは配流の官符を下され了んぬ。その中、前廷尉知康殊に奇怪を現すの間、憤り申さるるの処、陳じ申すべしと称し、関東に参向する所なり。何様に沙汰せらるべきや。勅定に随ふべきの旨、京都に申さるるべきの由と云々。

〔吾妻鏡〕 文治二年（一一八六）十二月一日条

この「奇怪を現す」というのが具体的に何を指しているのかはわからないが、結局、翌十二月十七日に、知康は解官されている。そして、翌文治三年一月二十三日条には、「事露顕するの後、一旦の難を遁れんが為」に知康が鎌倉に到着したものの、処置に困った頼朝が後白河院に判断を求めるも明確な返答が得られずに困惑しているとの記事があり、さらに、同年の八月二十七日には、頼朝が「義経・行家等に同意する者なり。随つて別して仰せなし。この上は進上すべきか」と京都に派遣した使者下河辺行平に言上させている。ここでも知康のどういう言い分や行動が頼朝を困惑させているのかわからないのだが、最後まで、頼朝は知康の処遇を後白河院に委ねようとしている。ところが、翌月三日条に記された後白河院の返答では、知康は鎌倉への下向についても院に報告せず、鎌倉滞在中も音沙汰がなかった、京に追い返すかどうかはそちらで決めるべきで、こちらは関知しない、と突き放すものだった。知康は、頼朝にも後白河院にも相手にされなかったのである。延慶本『平家物語』の言う「万ズ、無返事」や覚一本の言う「しやつにめな見せそ、あひしらるなせそ」という頼朝の台詞は、この時の頼朝の態度の反映なのではないだろうか。

さらに、『吾妻鏡』では、頼朝死去後の建仁二年の頼家主催の蹴鞠の会に北条政子が訪れた日のエピソードが記される。人々が集まった頃夕立が降り、すぐに止んだのだが、周辺は雨に濡れ、蹴鞠を開始できずにいた。その時に、知康が直垂や帷子を脱いで、木からしたたり落ちる雨水を受けるといふパフォーマンスをし、座が盛り上がったのだ

という。申の刻から始まった蹴鞠が終わった後の酒宴では知康が鼓を担当し盛り上げた。そして、知康は「酒狂の余り」、北条時連に「連」の字が錢貨を連想させる「下劣」な文字であることを理由に改名を勧め、將軍頼家の勧めもあって、時房と名乗ることになったという。

こうした経緯を直接見ていたであろう北条政子の思いが語られるのが、翌二十六日条の以下の記事である。

尼御台所還らしめ給ふ。昨日の儀、興有るに似たりと雖も、知康独歩の思ひを成す。太だ奇怪なり。伊豫守義仲法住寺殿を襲ひ合戦を致すに依て、卿相雲客恥辱に及ぶ。その根元は知康が凶害より起こるなり。また義経朝臣に同意し、関東を亡ぼさんと欲するの間、先人殊に憤らしめ給ふ。解官追放せらるべきの旨、奏聞を経られはんぬ。而るに今彼の先非を忘れ昵近を免さる。亡者の御本意に背くの由御気色有りと云々。

（『吾妻鏡』建仁二年（一一〇二）六月二十五日条）

『愚管抄』や『吉記』の記す知康の、いわば「ヲコの者」としての特質を法住寺合戦に直接結びつけたものとしてこの記事は注目される。寿永から文治へと続く激動の世の中であって、人を惹きつける特殊な才能を武器に権力者の間を泳ぎまわった知康の生き方を知っている政子が、知康が頼家や北条家に近づくことに対して警戒の念を抱いたと考えてよいだろう。

これら『吾妻鏡』の文治年間、建仁年間の記事と『平家物語』に直接の依拠関係があるとは言えないかもしれない。しかし、法住寺合戦後の知康の関東下向の可能性が低いとするならば、『平家物語』の知康関東下向記事には、こうした『吾妻鏡』の記事が無関係だったとは考えられないのではないか。実際にはもう青年だった頼家の幼少時の出来事だとするために、雨水を帷子で受け止めるという動作を、「ヒフ」というより滑稽な芸に変えたのではないかと考えられる。

さらに、想像をたくましくするならば、頼朝や政子の知康に対する印象が、『平家物語』において、知康を法住寺

合戦の、ある意味での主役に仕立てあげるのに大きく関わった可能性もあるのではないか。鎌倉で語られた、知康のイメージや評判が、物語の成立の背景にあるように思えてならない。知康の造型は、後白河院と頼朝という二人の権力者と深く関わっているのだ。

三、後白河院方の人々の戯画化

法住寺合戦について語る『平家物語の』記事で、おそらく実際の行動とはかけ離れた、戯画化された描写がなされ、笑いの対象になっている後白河院方の武士は知康だけではない。

そうした人々の描写は、例えば、延慶本では以下のようなエピソードに見られる。

① 御所に籠もっていた公卿殿上人、比叡山や園城寺の僧徒、駆武者たちが、義仲軍の放火に驚いて、慌てふためく様子。

② 多田行綱ら摂津源氏が、御所から落ちる際に、義仲軍の落ち武者と間違われて、近隣の民衆から磔を投げられ、「院方の武士だ」と名乗っても聞き入れられなかった様子。

③ 刑部卿三位頼輔（豊後守）が院御所から迷い出て七条河原で物取りに遭い、衣服を剥ぎ取られて裸になって立ち竦んでいると、知り合いの僧侶が気がつくが、短い衣を着せかけ、しかも頭からすっぽりかぶり足がむき出しになった。その格好で兄の家に向かうも、慌てる様子もなく、あれこれ問いかけながら呑気に歩くのだった。

延慶本では、これ以外の潔く戦った人の話も比較的詳しく載せるが、覚一本では、簡単な記述で紹介されるのみである。法住寺合戦に後白河院方として参加した公卿や武士が、このように戯画化されるのはなぜか。筆者はこのこと背景に、当時の史料からうかがい知ることができる、後白河院に対する批判の感情を読み取りたいと思う。

例えば、『玉葉』の筆者九条兼実は、法住寺合戦の火蓋が切られるまでの緊迫した、義仲と後白河院の対立を書き残しているが、その中の閏十月二十日条では、義仲が、院の使者としてやってきた静憲法印に対して、「君を怨み奉

る事」として、「頼朝を召し上げらるる事、然るべからずの由を申すと雖も、御承引無し。猶以て召し遣はされをはんぬ」こと、「東海・東山・北陸等の国々下さるる所の宣旨に云く、もしこの宣旨に随はざるの輩有らば、頼朝の命に随ひ追討すべしと云々。この状義仲生涯の遺恨たるなり」の二点を挙げたと伝え、「天下の滅亡、ただ今来月に在るか」と結んでいる。義仲の後白河院に対する不満は、院が頼朝と結ぼうとしたことに起因するのだと兼実が考えていることがはっきりわかる。そして、兼実は、開戦直前の十一月十七日条で、義仲の申状は穩便なものであり、「王事の軽きことは是非を論ずるに足らず」と、痛烈に後白河院を批判する。義仲と組もうとしたのに、すぐに手のひらを返して頼朝に接近する院の行動を軽々しい、というのである。さらに、当日の記事で戦いの経緯を述べた後でも、次のように記し、この戦いの要因が後白河院の側にあつたとの見方を示す。義仲について、院を誡める使者なのか、という言い方をしているのである。

…：夢カ夢ニ非ザルカ、魂魄退散シ、万事覚エズ。凡ソ漢家本朝天下ノ乱逆、其ノ数有リト雖モ、未ダ今度ノ如キノ乱ハ有ラズ。義仲ハ是不徳ノ君ヲ誠ムル使ナリ。其ノ身ノ滅亡、又以テ忽然カ。惣ヒニ生マレ此クノ如ノ事ヲ見ル。只宿業ヲ恥ツベキモノカ。悲シムベシ、悲シムベシ。（『玉葉』寿永二年（一一八三）十一月十七日条）

また、慈円も『愚管抄』において、以下のように述べて、後白河院方にも非があり、こうした事が起きたことを末法の世のなせる技だと言っている。

イカニモく／＼コノ院ノ木曾ト御タ、カイハ、天狗ノシワザウタガイナキ事也。コレヲシヅムベキ佛法モカク人ノ心ワロクキハマリヌレバ、利生ノウツハ物ニアラズ。術ナキ事ナリ。（『愚管抄』卷五）

そうした、都の人々の書き残した言葉を見る時、筆者が注目したいのが、行綱たちに投げかけられた飛礫である。

鹿谷の陰謀の密告者として有名であり、近年、一ノ谷合戦で、義経が行った坂落としと称される攻撃を行った人物として名の上がる行綱であるが、その行動が常に後白河院に忠実な立場を崩さないものであったことについては既に述べたことがある(5)。巻八のこの場面でも、行綱は後白河院に近侍し御所に立て籠もったが、敗色濃厚になり脱出してきたと読んでよい。行綱は後白河院の身替わりなのではないか。実際の後白河院は五条にあった基通の屋敷(物語では五条の里内裏)に逃げ延びたのであるが、その分身ともいってよい行綱が、京都の人々によって義仲側と誤解され、石を投げられるのである。以下に、延慶本を引用する。覚一本などでも概ね同じ内容である。

…七条ガ末ハ撰津源氏多田ノ藏人、豊島冠者、大田太郎等固タリケルモ、七条ヲ西ヘ落ニケリ。軍以前ニ在地者共ニ、「落ム折ハ打伏ヨ」ト知康下知シタリケレバ、在家人等、家上ニ楯ヲツキ、ヲソイノ石ヲ取集テ待処ニ、御方ノ落ヲ敵ノ落ト心得テ、我ヲトラジト打ケレバ、「是ハ御方ゾ」ト、「是ハ院方ゾ」ト、面々ニ名乗レドモ、「院宣ニテアルゾ。只打伏ヨ」ト打ケレバ、軒下ヘ馳ヨリ門内ヘ逃入テ、物具脱置テ、ハウクゾ落ニケル。
(延慶本『平家物語』卷八・廿五「木曾法住寺殿へ押寄事」)

この飛礮を投げるといふ戦闘行為を行う者たちについては、この直前の、後白河院方が召集した軍勢の中に加わった集団としても見えている。

…知康ハ御方ノ大將軍ニテ、門外ニ床子ニ尻カケテ、赤地錦直華ニ、ワキ立計ニテ、廿四指タル征矢ヲ一筋拔出テ、サラリクトツマヤリテ、「哀レ、シレ者ノ頸ノ骨ヲ、此矢ヲ持テ只今射貫バヤ」トゾ旬リケル。又万ノ大師ノ御影ヲ書集テ、御所ノ四方ノ陣ニヒロケ懸タリ。御方ノ人々ノ語ヒタリケル者共ハ、堀川商人、町冠者原、飛碓、因地、乞食法師原也。合戦ノ様モイツカ可レ習、風モアラク吹バ倒ヌベクシテ、逃足ヲノミ踏タル者共ゾ多ク参リ籠リタリケル。物ノ要ニ立ヌベキ者ハナカリケリ。

(延慶本『平家物語』卷八・廿三「木曾可滅之由法皇御結構事」)

この「堀河商人、町冠者原、飛礮、因地、乞食法師原」は、これまでも指摘されてきたように、武士でもなく、社会の下層の人々で、何かあった時には武器ではなく投石で相手を攻撃する人々であろう。ただし、彼らが相手にしたのは義仲軍であり、ここでは、後白河院に味方する武士の手薄さ、そうしたものに頼らざるを得なかった実情を表現していると言わなければならない。つまり同じ行動を取るが、院方に加わって院御所に参上した飛礮打ちと、行綱たちに石を投げた京都の人々は同じではないことに注意が必要である。

一方、行綱たちに石を投げた後者の人々(ちなみに中院本『平家物語』では「京中のざい地のものども」)は、なぜ、行綱ら正統な武士たちの訴えに耳も傾けずに石を投げ続けたのであろうか。

この、院があらかじめ召集した方の飛礮打ちについては、浅香年木の次のような論考(6)がある。

……『平家物語』の諸本の、この部分は、法住寺殿を固めていたのが、「いふかひなき」雑多な寄集兵力にすぎなかったことを強調するための描写であり、裏付けとなる事実を検出することは困難である。しかし、……(清水)……こうしたことが十分に想定し得ることだとした上で、堀河商人、町冠者原、飛礮因地、乞食法師原といった)……都市下層住民が、反義仲連合の軍事行動に荷担したと説かれていることも注目を要する。これら雑人・下人などの都市下層住民が、かりに反義仲連合に加勢していたとすれば、それは権門擁護のためというより、反乱の拡大によって坂東・北陸道諸地域との交通路を封鎖され、西日本一帯の凶作・飢饉に苦しみ、その上、義仲軍団の入京と平氏一門の西日本占拠によって、甚大な被害を受け続けている都市住民としての生活防衛闘争の一つの表現だったといえよう。

この論考の後半部分に説かれる都市住民としての彼らの実態は、院方に召集された人々というよりは、むしろ、行

綱らを攻撃する京中の人々に当てはまるのではないだろうか。行綱らの必死の訴えに耳を貸さずにひたすら石を投げた民衆のエネルギ―は、狂気にも近い迫力である。とすると、ここで戯画化されているのは、武力に困って飛礫打ちまで召集したにもかかわらず、同類とも言つてよい民衆に逆に攻撃される後白河院ではないだろうか。そして、そこには、先ほどから述べている、当時の貴族階級にまで広がっていた後白河院に対する批判が読み取れるのだと考える。

もちろん、兼実のような公卿は、むしろ、民衆から見たら体制の側、王権の側の人々であろうから、そうした公卿が書き残している後白河院批判を民衆のものと同じだと受け取るには慎重であるべきであろう。しかし、例えば、文治元年の秋に、頼朝と対立した義経が、都を再び戦火に巻き込むことを避けて都から落ちていったと高く評価されたように（『玉葉』など）、京都市中で戦いが起こることへの京都の人々の反感はあったと考えてよいのではないかとそうすると、法住寺合戦から間もないころにこの出来事を語る時、そこに後白河院への批判がつきまとっていたという想像も間違いではないだろう。

ただし、そうした戯画化された記事が覚一本においても色濃く残っている事の意味については慎重であるべきかもしれない。時間が経つにつれて、ただ単に面白おかしい話として人々を喜ばせた話として読み継がれた可能性もある。

四、王権にまつわる戯画化の身体性

前章で述べたような、後白河院方の人々が、院への批判を受け、その身替わりのように戯画化されて笑いの対象になつていくという構図は、鎌倉でのエピソードの影響も受けて造型された、『平家物語』における知康も同じであろう。実際にそうした描かれ方をする素養を持ち合わせていたとは言え、法住寺合戦の敗因を一人で背負わされる。

延慶本『平家物語』において、知康が頼朝の前で披露したのが「ヒフ」であり、そのモデルとなつたのが、大人に

なつた頼家の催した蹴鞠の会での即興の動作であつたことも述べた。「ヒフ」としたのが、法住寺合戦の直後に設定された物語での鎌倉下向だと、頼家がまだ満一歳だという事情があつたのではないかとも推測した。しかし、延慶本の「ヒフ」を披露する知康の描写には、『吾妻鏡』の記事にはない身体の動きが感じられる。

さらに、前章で述べた行綱らが石を投げられた話も、道具を脱ぎ捨てて「ハウ〜」逃げる彼らの描写は、読者が具体的に想像しやすい痛みを伴っている。矢で射られる痛みよりも身近なのである。また、前章では詳述しなかつた院方の者の笑い話として、豊後守であつた刑部卿三位頼輔の話の身体性も気になるところである。裸にされて十一月中旬の寒風の中で震える男の知り合いに借りた短い僧衣を頭からかぶり、足をむき出しにして逃げて行く姿は、物語の中の京の人々の嘲笑を誘い、ひいては読者の笑いの対象となる。この頼輔は、同じ巻八で平家を九州に上陸させないようにと命令を下したことが紹介され、その際に、平時忠が悔し紛れに「鼻豊後」と嘲つた人物である。鼻が大きかつたということだろう。ここでも身体的特徴で嘲笑されている。

こうした戯画化は、『平治物語』の藤原信頼の描かれ方を思い起こさせる。史実では競べ馬などで活躍したとされる信頼であるが、物語ではあまりにも太つてしまつていて、馬にも乗れなかつたと語られる。後白河上皇と二条天皇がすでに内裏を脱出したと知つて武装して出陣しようとするものの一人では馬にも乗れず、家臣が押し上げてみるも反対側に転げ落ち、その時にできた鼻の傷で、死後その首だと判明したと徹底的に愚弄される。

この信頼も、後白河院の近臣でありながら、信西との争いから平治の乱を起こすに至り、後白河院が逃げた後に、その身替わりのように殺されていく。構図としては、知康、行綱、頼輔と同じである（彼らは敗死しないが）。こうした信頼の描かれ方について、佐倉由泰氏は次のように述べる(7)。

……『平治物語』の表現世界が祝祭的であり、信頼が道化的で、王の如く振る舞つた挙句に無惨に殺害されることに関心を払うならば、『平治物語』の信頼は、ミハイル・バフチンが注目し、山口昌男が重視した「モック・キング(偽王)」の概念に類縁性を持つようである。「モック・キング」とは、「アフリカ以外の多くのアーカ

イックな社会で観察された、儀礼又は儀礼に随伴するカーニバル空間で、道化を仕立てて戴冠、登極させて後に殺すか又は打擲して追放する「習慣において見出される偽の王のことである。

法住寺合戦を描く『平家物語』の記事にあつては、行綱と頼輔が、殺されこそしないが、身体的な痛みを伴つて人々から罵倒されている。それは、やはり後白河院の身替わりとしての苦痛なのではないだろうか。

五、義仲の戯画化と頼朝

木曾義仲の『平家物語』での造型が、三つに区分されることについては夙に指摘がある。北陸道を駆け上るように都に迫る合戦譚における武将義仲の活躍を描く話と、巻九での最期を描く悲劇の話に挟まれた巻八での義仲は、これまで述べてきたように、「ヲコノ者」である鼓判官に「ヲコノ者」と言われる戯画化された義仲である。「猫間中納言」とのやりとりや、牛車の乗り方を知らずに馬鹿にされ、さらに法住寺合戦に勝利した後でも、天皇になろうか、でも（後鳥羽天皇のような）童形にはなれないし、出家がいやだから法皇にもなれないし、では関白にでもなろうか、と嘯く。徹底して愚弄され、それが義仲の滅亡の要因だと語られていく。

義仲が京都で政権運営に失敗した事情としては、様々な事情が指摘されている。養和の飢饉の影響、安徳天皇不在を受けて問題となった次期天皇の選定に口を出すという失策、孤兒から出発し、子飼いの部下をほとんど持たなかった彼が率いらざるを得なかった混成の大軍のコントロールの失敗、途中から行動を共にした叔父行家との関わり、などなどである。しかし、物語はそうした史実に触れることなく義仲を造型していく。

そのように義仲が戯画化されて語られたことが、読者にとって義仲像を一つに結ぶ際の難しさの原因となつているのだろう。では、どうしてそうした一連の話を創作して義仲を「ヲコノ者」、または田舎者として語る必要が『平家物語』にはあつたのだろうか。この理由についても様々な議論があつた。当時の京都の民衆の怒りが背景にあるとい

う見方もされてきた。前章では、そうした怒りの感情が後白河院への批判になつていたという見方を示したが、貴族の立場として事情に詳しい兼実らとは違つて、養和の飢饉の影響に続く戦乱の中で苦しむ民衆の怒りの感情が、そうした事態をもたらした義仲に向かつた可能性も十分考えられよう。

ただ、筆者は、巻八において義仲がここまで愚弄される意味について、別の見方を提示してみたい。それは、主役の座の交替である。巻六で描かれる清盛の死後、物語の流れを主導してきたのは義仲である。それが、頼朝とその意を代弁、代行する義経に変わつてきたということではないだろうか。そして、もちろん、壇ノ浦合戦後には、義経は頼朝の代理の座を明け渡して物語の世界から去つて行くのであるが。

巻八には、頼朝が征夷大將軍の称号を後白河院から与えられ、中原康定がその使いとして鎌倉に下り、頼朝に伝え歓迎されたとする章段がある。延慶本で言う「十五 兵衛佐征夷大將軍宣旨事」「十六 康定関東ヨリ帰洛シテ関東事語申事」であり、覚一本の「征夷將軍院宣」である。もちろん、周知の通り、頼朝が征夷大將軍の称号を受けるのは、建久三年（一一九二）のことであり、寿永二年（一一八三）のこの時期に後白河院から頼朝に伝えられたのは、いわゆる寿永二年十月宣旨というものである。

義仲入京後まもなく、後白河院は、中原康定を派遣して頼朝に上京の要請をしたらしい。『百鍊抄』や『玉葉』の記事に依れば、康定の鎌倉下向は七月二十八日から九月下旬であることがわかる。しかし、頼朝はそれを次のような理由で断つてゐる。この記事の中の頼朝を評価する言葉も気になるところである。

頼朝使者ヲ進ズ。忽チ上洛スベカラズト云々。一ハ秀平・隆義等、上洛ノ跡ニ入レ替ハルベシ。二ハ数万ノ勢ヲ率キ入洛セバ、京中堪フベカラズ。コノ二故ニ依テ、上洛延引スト云々。凡ソ頼朝ノ体タラク、威勢嚴肅、ソノ性強烈、成敗分明、理非断決ト云々。
 （『玉葉』十月九日条）

この時、頼朝は、東海・東山・北陸三道について支配権を認めるよう要望したのだと考えられている。そして、

「東海東山諸國ノ年貢、神社仏寺并ビニ王臣家領ノ庄園元ノ如ク領家ニ随フ可キノ由、宣旨ヲ下サル。頼朝申シ行フニ依ルナリ」（『百鍊抄』同年十月十四日条）、「先日ノ宣旨ニ云ハク、東海・東山道等ノ庄公、服セザルノ輩アラバ、頼朝ニ触レ沙汰ヲ致スベシト云々」（『玉葉』同年十月二十二日条）とあり、宣旨が下されたことがわかる。これがいわゆる寿永二年十月宣旨である。東海・東山両道の莊園・公領を元の莊園領主たちの支配下にもどし、それに従わぬ者の対応を頼朝にまかせるという内容であった。東海・東山二道になったのは、後白河院が義仲を慮って北陸道へはずしたのだと推察されている。頼朝の不満が大きかったのか、康定は再び鎌倉に赴いている。

この宣旨の意義については、挙兵以来力をつけていった頼朝の独立性が認められたと評価するのか、逆に頼朝の力が朝廷に吸収されたと受け取るのか、判断が分かれているところである。今、頼朝に与えられたこの権限の意義について評価する材料は持たないのではあるが、『平家物語』の展開にとつて重要なのは、『玉葉』の十月九日条にも「頼朝本位ニ復スノ由」の仰せが下ったとあるように、頼朝が流罪を免されたこと、そして、後白河院が義仲に見切りをつけて頼朝との共闘に舵を切ったことではないだろうか。平家追討の役目を引き受ける者として義仲と同じ舞台上がってきたのである。

『平家物語』各諸本のこの章段について考える際には、もう一つ重要なことがある。それは、『平家物語』の記事と、『吾妻鏡』建久三年の征夷大将軍任命の時の記事が極似していることである。

延慶本の巻八「十五 兵衛佐征夷大将軍宣旨事」では、他に見えない征夷大将軍に任ずる宣旨そのものが記されるのであるが、次の「十六 康定関東ヨリ帰洛シテ関東事語申事」では、その時の儀式の様子が詳しく描かれ、その中で、その宣旨を受け取る役目を三浦義澄が仰せつかったこと、それは、義澄の父義明が治承四年（一一八〇）の挙兵時に頼朝に従って命を落としたことに報いるためであるというドラマが描かれていく。そして、康定には、頼朝から豪勢な引出物が与えられた。奥州の藤原秀衡や佐竹直義への言及などは、先に紹介した、頼朝が後白河院からの上京の要請を断わったという『玉葉』の記事に通じるものがあり、注目される。そして、これが『吾妻鏡』の以下の建久三年の記事と極めて類似することもすでに指摘されている。

勅使庁官肥後介中原景良・同康定等参着す。征夷大將軍の除書を持参する所なり。兩人（各々衣冠を着す）例に任せて鶴岳の廟庭に列び立ち、使者を以て除書を進すべきの由これを申す。三浦義澄を遣はさる。義澄、比企右衛門尉能員、和田三郎宗實、並びに郎従十人（各々甲冑）を相具し、宮寺に詣で、彼の状を請け取る。……中略……幕下（御束帯）予め西廊に出御す。義澄除書を捧持し、膝行してこれを進す。千万人の中に義澄この役に応ず。面目絶妙なり。亡父義明、命を將軍に献りをはんぬ。その勲功、髭を剪ると雖も、没後に酬い難し。仍て子葉を抽賞せらると云々。

〔吾妻鏡〕建久三年（一一九二）七月二十六日条
將軍家兩勅使を幕府に招請せしめ給ふ。寢殿の南面に於て御対面、献盃有り。加賀守俊澄、大和守重弘、小山七郎朝光等所役に従ふ。前少将、参河守、相模守、伊豆守等その座に候ず。退出の期に及んで各々鞍馬（羗毛、鹿毛）を給ふ。左衛門尉祐経、朝重等これを引く。両客庭上に降りてこれを請け取り、一拝の後退出すと云々。

〔吾妻鏡〕建久三年（一一九二）七月二十七日条

『平家物語』と『吾妻鏡』のこの記事の先後関係、依拠関係については、建久三年に与えられた征夷大將軍という称号の持つ意義や背景などについての新しい見解も含めて様々な議論があるところである(8)。『平家物語』が康定、義澄らが関わる物語を創作し、『吾妻鏡』が取り込んだのか、また、『平家物語』が『吾妻鏡』の記事を利用し、この十月宣旨の場面に置き換えたか。今後のさらなる検討が待たれるところであるが、筆者は、『吾妻鏡』の記事を『平家物語』が取り込んだと考えている。今踏み込んで論ずることはしないが、例えば、義澄以外にここに登場する武士たちが、『吾妻鏡』にはその前後においても頻繁に登場する者たちであるが、『平家物語』にはほとんど登場しない人物であり、『吾妻鏡』の流れの中に置く方がより自然に思えることなどが理由として指摘できると考えている。

建久三年に頼朝に与えられた征夷大將軍の称号が、頼朝本人の望みではなかったこともあり、鎌倉幕府ではさほど重視されていなかった(9)というのはその通りだと思う。しかし、また、結果として、頼朝以降の將軍のみならず、室町幕府、江戸幕府へと、武士政権のトップに立つ者の称号として受け継がれていったのも事実である。『平家物語』

が出来上がっていく段階の時代において、頼朝の権威が確定したターニングポイントとして、征夷大將軍という称号が与えられた時点で意識された可能性は大きいのではないか。このターニングポイントを十月宣旨の時点で置き換えるようにという構想が『平家物語』の編著者にはあったのではないか。逆に考えると、『平家物語』の作者は、この十月宣旨の持つ意義を十分に正しく認識していたのだろう。史実で征夷大將軍の称号を得た時よりも、罪人から復権し、正々堂々と朝敵を討つ者としての資格を得たことの意義の大きさを認識していたのではないかと思うのである。

こうした『平家物語』の歴史認識をさらに強く意識させられるのが、延慶本等において、征夷將軍宣旨の記事の次に、文覚によって、頼朝の父義朝の首を鎌倉に持ってこさせたという記事が並ぶことである。義朝の首が掘りおこされて頼朝のもとに届けられ、受け取った頼朝は勝長寿院を建立して納めるのであるが、この時期について、『吾妻鏡』は文治元年（一一八五）八月、つまり三月に平氏が滅んだ後のこととするが、『玉葉』などでは元暦元年（一一八四）のことであることは既に指摘されていて、『吾妻鏡』の史実性を疑わせる事象なのであるが、延慶本などではここで語られるのである⁽¹⁰⁾。罪人として獄門に捨て置かれていた首が掘りおこされて鎌倉に届けられたというのは、とりもなおさず、ここで頼朝に続いて義朝も復権したことになる。さらには、頼朝こそ河内源氏の正式な後継者なのだと認めさせる行為でもあるだろう。ちなみに、覚一本では、これは『吾妻鏡』と同様に、平氏が滅亡した後のでき事として卷十二「紺搔之沙汰」で語られる。

そして、そうした頼朝、義朝の復権と共に始まるのが、義仲の戯画化である。物語で、征夷將軍宣旨の前に語られる義仲の様子は、行家と共に入京し、後白河院の御前に参じた時の「赤地の錦の直垂に唐彩緘の鎧」といった姿である（延慶本では、巻七）。それ以後、義仲の要望や行動について描写される記事はなく、あらためて義仲が登場するのが、義朝の首の話に続いて語られる（覚一本では、征夷將軍宣旨の次になる）、猫間中納言とのエピソードである。延慶本では、この話は次のように始まる。

木曾義仲八都ノ守護ニテ有ケルガ、ミメ形キヨゲニテ吉男ニテ有ケレドモ、立居ノ振舞ノ無骨サ、物ナムド云

『平家物語』における人物の戯画化ということ（清水）

タル詞ツキノ頑ナサ、堅固ノ田舎人ニテ浅猿クヲカシカリケリ。理ヤ、信乃国木會山下ト云所ニ、二歳ヨリ廿七年之間、隱居タリケレバ、可レ然人ニ馴近付事モナシ。今始テ都人トナレソメモムニ、ナジカハヲカシカラザルベキ。

（延慶本『平家物語』卷八「十八 木曾京都ニテ頑ナル振舞スル事」）

これは、もちろん、その前の頼朝の話の中で語られる、「容顏不悪、貌大ニテ少シヒキブト二見へ候。貌バセ優美ニ、言語分明ニシテ」に対応するものであろう。

そして、水島合戦での義仲軍の敗戦、瀬尾兼康との戦い、行家との不和を経て法住寺合戦へと展開していく。その中で、既に述べたような義仲の戯画化は続いていくのである。こうした叙述の流れを見ていくと、義仲の戯画化と頼朝の本格的な登場の関係は明らかである。対平家の戦いを主導する主人公が交替し、脇役に甘んじる立場となった義仲の戯画化が始まったのである。

六、まとめにかえて

以上のように、『平家物語』が描く法住寺合戦は、関わった主要人物のほとんどが戯画化され、嘲笑されつつ展開した戦いであった。合戦そのものが戯画化されたと言つてよいだろう。筆者に最後に残された課題は、なぜ、法住寺合戦はこのような描かれ方をしているのか、という問題である。

延慶本の法住寺合戦譚は、乱の最終後に、武士によって厳しく警固されている後白河院に、出家して入道となつてまで面会した故信西の末子、宰相修憲の「只神鑑二任セ奉ラセ給ワズシテ、知康如キ奴原ガ奏シ申候ケルヲ御許容候ケルノミコソ、心憂ク覚候へ」という涙ながらの訴えで閉じられる。前出の武久論文も、物語作者の法住寺合戦観を表すものとしてこの場面を重視しているが、この言葉に込められた後白河院批判は痛烈である。

今回見てきた人物たちの戯画化の背景には、当然ながら後白河院の存在があつた。知康を始めとする院方の人々だ

けではなく、義仲の戯画化が始まる契機も、後白河院の頼朝への歩み寄りがあった。そうした後白河院自らによる「因」の結果としての敗北が法住寺合戦なのだというのが延慶本の認識なのである。物語作者には、敗者としての後白河院を救う手段がなかったのではないだろうか。その結果、戯画化し笑いを交えながら戦いを語るとする方法をとらざるを得なかったのだと考える。

一方、覚一本では、後白河院と対面した修憲は、この戦いで命を落とした主な人々について奏聞し、それを聞いた院が、明雲が自分の身替わりとして死んだのだと語って涙を流した、という内容になっている。後白河院への批判の言葉はなく、院の敗者としての心情を語って終わる。後白河院への批判という一つの軸を中心に、戯画化された登場人物の戦いとして描かれた法住寺合戦譚は、覚一本にあつては、軸が抜け落ち、ただ単に読者の笑いを誘うものとして残ったと言えるのかもしれない。

また、法住寺合戦記事の前後を通して一貫して戯画化されることもなく、称賛され続けたのが頼朝であった。そうした頼朝の姿は、『吾妻鏡』での描かれ方に通じるものがあった。『平家物語』と『吾妻鏡』の関係については、様々な議論のあるところである。また、『吾妻鏡』にも、単なる記録を超えた物語性があるという指摘も多い。しかし、延慶本の法住寺合戦譚のように、後白河院への批判という見方に基づき、全体を戯画化された人物で構成するという作があるのは、やはり文学作品としての『平家物語』ならではのものだと考えるだろう。文学として歴史を語るということと、歴史を語る方法としてストーリーを織り込んでいくということには大きな違いがあるのだ。

注

(1) 武久堅「延慶本平家物語の「法住寺合戦」、その顛末」(『日本文藝研究』五八一四、二〇〇七・三・一〇、のち『平家物語・木曾義仲の光芒』世界思想社、二〇一三)。

(2) 阿部泰郎「ヲコの文学としての『平家物語』―鼓判官知康と『笑い』の芸能」(山下宏明編『平家物語 研究と批評』有精堂、一九九六、のち『聖者の推参』(名古屋大学出版会、二〇〇二)、名波弘彰「義仲物語(法住寺合戦)における平知康の

- パフォーマンスをめぐって」(筑波大学文藝・言語学系『文藝・言語研究 文藝篇』三七、二〇〇〇・三・三〇)、朴恩姫「法住寺合戦考―知康の(ヲコ)性をめぐって―」(筑波大学比較・理論文学会『文学研究論集』二二、二〇〇三・三・三一) など。
- (3) 注(2)の阿部氏の論考など。
- (4) 注(2)の阿部氏の論考。
- (5) 拙稿「『平家物語』における多田行綱―「裏切り者」と言われた男の素顔」(国文学研究資料館編『歴史叙述と文学』二〇一七・三・二四、のち『平家物語を繙く』(若草書房、二〇一九)。
- (6) 浅香山木「治承・寿永の内乱序説 北陸の古代と中世2」(法政大学出版局、一九八二)二七七ページ。なお、飛礫に関しては、中沢厚「つぶて」(法政大学出版局、一九八二)、網野善彦「飛礫覚書」(『日本思想大系』二一月報、一九七二、のち『異形の王権』平凡社、一九九三)、「中世の飛礫について」(『民衆史研究』二三、一九八二、のち『異形の王権』同)などの論考がある。
- (7) 佐倉由泰「軍記物語の機構」(汲古書院、二〇一一)、二一九ページ。なお一部省略した。
- (8) 岩田慎平「頼朝の征夷大將軍就任をめぐる『平家物語』と『吾妻鏡』―『吾妻鏡』建久三年七月二十六日条・二十九日条について―」(立命館大学人文学会『立命館文學』六五四、二〇一七・一〇)など。
- (9) 櫻井陽子「頼朝の征夷大將軍任官をめぐって―『三槐荒涼拔書要』翻刻と紹介―」(『明月記研究』九、二〇〇四・十二・二五、のち『平家物語』本文考、汲古書院、二〇二三)、同『平家物語』の征夷大將軍院宣をめぐる物語」(『中世文学と隣接諸学4 中世の軍記物語と歴史叙述』(竹林舎、二〇一一・四)などの論考が詳しい。
- (10) これについては、春日井京子「紺掻の沙汰」の生成と展開―覚一本を中心に」(栃木孝惟編『平家物語の成立』(千葉大学社会文化科学研究プロジェクト報告書、一九九七・三))が詳しい。

※ 使用本文

- 延慶本『平家物語』―櫻井陽子・小番達「校訂延慶本平家物語」(八)』(汲古書院、二〇〇六)
- 覚一本『平家物語』―新古典文学大系『平家物語』(岩波書店)
- 『吾妻鏡』―新編増補国史大系『吾妻鏡』(吉川本などを参考に私に読み下した)
- 『玉葉』―國書刊行会本(私に読み下した)